

禁忌の世界：『説経』から『近松』へ

著者	岩崎 武夫
雑誌名	日本文学誌要
巻	23
ページ	20-32
発行年	1980-02-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019264

禁忌の世界 —『説経』から『近松』へ—

岩崎 武夫

一、説経「かるかや」と玉屋

説経「かるかや」の世界を簡潔にいうと、出家遁世した加藤左衛門重氏（荳萱道心）と、その後を追って還俗を迫る御台所と石童丸の、いわば追うものと、追われるものの追跡と遁走の譚である。道心が叡山の麓、黒谷から最後に逃げこんだところは高野山であり、その高野山は女人結界の聖域であって、女人は容易に近づけないきびしい禁忌がある。

さて道心に会うべく、御台と石童丸は、高野山の麓、学文路^{かぶろ}にある玉屋という宿に着く。

この玉屋は、高野七口と呼ばれた登山コースの一つである不動坂口の登り際にあつて、「紀伊続風土記」や「紀伊名所図会」などにのっているかなり名の知れた宿所である。⁽¹⁾

その玉屋の主は与次といい、いろいろな背景を担った興味深い人物

といえるだろう。

彼はまず、高野山女人禁制のいわれを母子に伝え、御台の登山を制止する役目を演じる。

「いかに旅の上臈に申すべき、高野の山へは、御存じあつて上ろうと御意あるかまたは知らないでお上りあらうと御意あるか。高野の山と申すは、一里結界、平等しりきの御山なれば、八葉の峯八つの谷三箇の別所、四箇の院内、七里結界、平等しりきの御山なれば、男木が峯に生ゆれば、女木ははるか谷に生ゆる。雄鳥峯を飛べば、雌鳥はるか谷に飛ぶ。牡鹿が峯で草を食めば、牝鹿は谷で草を食む。木萱草木、鳥類畜類までも、男子というものは入るれども、女子というものは入れざれば、一切女人は御きらいなり。」

この語り口は、説経に馴染みのあるもので直江津の逢岐の橋で、づし王母子を脅す「さんせう太夫」の人買い山岡太夫。てるて姫を

ふるえ上らせた「小栗判官」の旅商人、後藤左衛門など、いずれも物事の縁由を語りながら、相手を威圧するようなところのあるのが特徴である。しかし人買いや旅商人が、旅を生活にしているのに対して、前者の玉屋の与次は宿の主になっている。したたかさという点では甲乙つけ難いが、人買いや旅商人が時と所を変えて、変幻自在に振舞うのに比べて玉屋の与次には、高野山の玄関口に居すわり、登山の女人をきびしくチェックする関守りの面影がある。さてこの与次は、石童丸の母が制止をふり切って高野へ登ろうとするのを見て、

「いかに上藤様に申すべき、高野の巻とやらんを、そつと聴聞申してござあるほどに、あらあら語つて聞かせ申すべし。」（傍

線筆者）

とたたみかけ、開祖弘法大師とその母あこう御前の物語りを長々と語って聞かせる。この挿話は『弘法大師御本地』の内容と前半が重なり、後半は別の伝承からなる土俗的な語りで『高野山通念集』巻九「袈裟掛石」の項にもっている。すなわち前半は大師の幼年時代から入唐の時期を経て、高野に霊場をひらくまで。後半は、母のあこう御前が、大師と会うために讃岐からはるばる尋ねたものの、女人禁制の掟は、開祖の母も例外ではなく、遂に登山を断念するまでを、山中の袈裟掛岩をはさんで、母子が対立するところをやまとした話である。

宿の主でありながら、高野の巻の語り手でもある。そういう二重

の映像を与次はもっているが、これは高野聖を下地にしたものか、あるいは全く独自に、説経語りの想像力の所産なのか決め手となるものは何もない。ここでこの問題からしばらく離れて、その与次が身を置いた玉屋という宿について、そこでどのような事が起こったか、筋をもとにもどって追ってみたい。

与次の長物語りに登山を断念した御台は、石童丸を一人登らせるが、その下山を待つ間に病に伏し、玉屋の一室で不治の人となってしまう。この辺りの語り口は、すでに死を予知する御台の側から語られていることもあって、そのことばのひとつひとつには、生死の際にあるものがはじめて発することのできる自己抑制と情念の交叉するひだを覗かせており、聴く者の心を鎮静させる効果がある。

「このういかに与次殿、さてみずからは、今日の日を、え過ごすまいとの覚悟なり。もしもむなしくなるならば、膚に黄金の候を、与次殿に参らす。かげを隠いてたまわれの、膚が守りと黒木（黒檀）の珠数をば幼い者が下りたらば、これを形見にやりてたべ、鬢の髪をばのう国許に残し置く、姉千代鶴に届けよと、幼い者にやりてたべ。今も来ぬかまだ来ぬか、まだ参らぬか悲しやの、のういかに与次殿よ、夫の行方は聞かずとも一度会いたや石童や。恋いし恋いしとのたまいし、その恋風や積もりけん、さて定業や極まりけん、惜しむべきは年のほど、惜しかるべきは身の盛り、明け三十を一期とし、明日の日を待ちかね、今宵むなしくおなりある。」

いまわの際のことばとして、あれほど跡を追いかけた夫の道心よりも、子の石童に未練を残して死んだ御台の心は哀れという外はない。最愛の夫はともかくも、子の石童からも離れて、たった一人で異郷の地の宿で果てなければならなかった運命を思うと、人間の行きつくところに待ち受けている窮極の孤独地獄が、そこに垣間見られたような気がする。

とくに「かげを隠いてたまわれの」の一句には、死を予期したものが、己れの肉体と魂の処置をねんごろに託している、陰々とした情がこめられていて涙を誘う。

玉屋の与次以外に頼むすべがないので死後の処置を任せたのであり、話の展開の上で、これは自然の成行きというべきであろう。しかしここで玉屋という宿の名にこだわってみたい衝動がある。玉屋とは霊屋^{たまや}からきた命名ではないだろうか。柳田国男はタマ屋について次のようにいう。死体の第一次の葬地として、もとは岩屋や樹立が当てられていたものが、簡単な小屋をもつてするようになったのが喪屋であるとして、

「もとはその喪屋を構えた場処が、第一次の葬地であったことと思う。貴人の御喪に当って鳥辺野の傍にタマ屋といふものを造ったといふことは、栄華物語の中にも見えて居て、是が近年の御霊屋と同じもので無いといふことは本居先生もすでに注意して居られる。私はこのモヤをタマヤといったということに可なり大きな暗示を見出すのである。⁽²⁾」

ようするに、喪屋Ⅱタマヤとは、墓や骨堂を第二次の葬地Ⅱ祭地とすると、第一次の葬地を意味するところであって、ここで死者のためにお籠りするのが習わしである。

玉屋Ⅱ霊屋で御台所が死ぬ運命にあったのは、偶然とはいいながら、言外にそこが葬所のイメージをもっていたからである。玉屋は近世化されると完全に宿屋としての体裁を整えてくるが、説経⁽³⁾のかでは霊屋Ⅱ喪屋の観念が強く働いており、宿所Ⅱ喪屋の重層したイメージに特徴を残している。

すでに前述したが、御台が死を自覚しつつ形見分けのことばを与次に伝えるところがあったが、それが玉屋Ⅱ霊屋という場の中で行なわれているところに意味がある。それは死の世界に入っている者が、生者に向けて送る別れのメッセージのようなものであり、タマ屋という場を背景にすることによって、単なる形見分け以上のものになっている。

しかしタマ屋という場の設定が、もっとも効果的に使われているのは、死んだ御台とひそかに対面する道心の愁嘆に求められるであろう。

「道心このよし聞こしめし、人のないこそうれしけれ、間の障子をさりと明け屏風引き退け見たまへば、北枕に西向いて、往生とげておわします。死骸にかっぱと抱きつき、さぞや最期のそのときにみずから恨みたもうらん。変る心のあるにこそ、変る心はないものを、後生問う（用う）て参らせん。これにつ

けても石童が、心のうちのさぞあるろ、あまりに嘆くものならば、あの石童が悟るらんと忍び涙をおしとどめ、剃刀を取り出だし、髪下そうと召さるるが、なにか十三年先に、捨てたる御台のことなれば、好しみ悪しみが思われて、剃刀立て処も見も分けず、されど髪をば、四方浄土と剃りこぼし、野辺の送りを早めんと、先を道心、後を石童丸のお舁きあるが……」

すれ違いに終始した道心と御台が、はじめて夫婦らしい夫婦として対面したのは、皮肉にも御台の死の床であって、死骸に向ってしか情愛の告白を行ないえない道心の心は、禁忌に縛られているものもつ頑な一面を覗かせているが、一方でまた、僅かに開かれた心をはじめて吐露した、人間らしいやさしさに満ちた真実の声でもあったといえよう。

こうした情の告白ができたのは、御台がすでに物言わぬ死の世界に入っていたからであり、女人禁忌の掟を犯さずに済んだからである。しかし同時に、死の世界に入った人々と交情が慣習として可能であったタマヤという場の存在が重要な条件として働きかけていることは間違いない。勿論説経の中に出てくるタマヤは、純粹に宗教的な意味での霊屋ではない。玉屋という宿所であって、そこには多くの人の出入りが当然のことのように予想されている。だからこそ、その出入りの高野詣での人々を相手に、与次の語りが生きてくるといふ関係にある。あまり抹香臭い解釈は行き過ぎというものかも知れない。しかし、にも拘らず、タマヤが宿所であり同時に霊屋

でもあるという二重の映像を強く喚起してくるに、説経の説経らしい特色があるわけで、御台と道心の対面はこのことを鋭く示唆していると思う。

これについては別の例をあげて傍証としたい。物言わぬ世界に入っているものとの交情といえば、「小栗判官」にも似たような場面がある。美濃の青墓の宿から、巫女に身をやつしたてては、餓鬼身となった小栗を土車にのせて、その先導役となり、東海道を上って近江国関寺にやってくる。その関寺の門前にある玉屋の前で、餓鬼の小栗に寄り添うようにして一夜を明かしたてては、小栗の胸札に後事を托すことばをつづり、名残りを惜しみながら青墓へ戻ってしまう。その別れの場面を次のように描く。

「おいそぎあれば、ほどもなく、西近江に隠れなき、上り大津や、関寺や、玉屋の門に、車着く。てるて、このよし御覽じて、あの餓鬼阿弥に、添い馴れ申そうも今夜ばかりと思しめし、別屋に宿をも取るまいの、この餓鬼阿弥が車のわたてを枕としなされ、八声の鳥はなけれども、夜すがら鳴いて、夜を明かす、五更（午前四時ごろ）の天も開くれば、玉屋殿へ御ざありて、料紙、硯をお借りあり、この餓鬼阿弥が、胸札に、書き添えこそはなされけり。海道七か国に、車引いたる人は多くとも、美濃国、青墓の宿、万屋の君の長殿の、下水仕、常陸小萩と言いいし姫、さて青墓の宿からの、上り大津や関寺まで、車を引いて、まいらす。熊野本宮、湯の峯にお入りあり、病本復

するならば、かならず、下向には、一夜の宿を参らすべし。かえすがえす、とお書きある、なにたる因果の御縁やら、蓬萊の山の御座敷で、夫の小栗に離れたも、この餓鬼阿弥と別るるも、いずれ思ひは同じもの、あわれ、身がな、二つやれ、さて一つのその身は、君の長殿に戻したや、さて一つのその身は、この餓鬼阿弥が車も引いて、とらせたや。心は二つ身は一つ、見送り、たたずんで、御ざあるが、おいそぎあれば、ほどもなく、君の長殿に、お戻りあるは、諸事のあわれと聞こえける。」

ここに出ている関寺は、能の「関寺小町」で有名であるが、大津市神函別所にある時衆派長安寺がその跡と伝えられている。

その関寺と玉屋がどのような関係にあるのか、よくわからないが、「関寺や、玉屋の門に車着く」というつづきからいうと、恐らく門前地の一隅にあったものと思われる。⁽⁴⁾しかし関寺はともかく、玉屋が果して実在したものかどうか、現在ではつきとめることはむずかしい。実在か虚構か、その詮索はともかくとして、問題は玉屋にたどり着き、その門前で物言わぬ餓鬼の小栗に向って、別れを惜しむてのくどきにある。

沈黙する醜い小栗の姿は、恰も罪穢を身にまとった、人の手に触れることを忌避するタブーの感覚がある。その小栗に接近し、情愛を隠そうとしないてには、罪穢を恐れぬ呪術宗教的な面影があるが、母性的な庇護の愛のようなものも認められる。同時に妻とし

て実の夫に語りかけているようなところもあって、その二重三重のイメージの複合に目新しさがある。

あの世から復活してきた小栗が、はじめててると親しく接するのは、この玉屋の門前である。しかし餓鬼の小栗はてててを知らないし、ててもまた眼前にいる餓鬼が小栗であることを知らない。不思議な因縁（因果）が二人を結びつけているに過ぎない。しかし二人を結びつけているのは因縁だけでなく、玉屋Ⅱ霊屋という、死者と生者の対面が可能であった場を抜きにしては考えられないであろう。『荳』で、道心と御台が対面したのも玉屋であった。御台はすでに死んでおり、死者との対面という形をとっている。死の世界に入ったものに対して、あたかも生きているものの如くに話しかけることができたのは、そこが玉屋Ⅱ霊屋であったからで、この関係は『小栗』の場合も変わらない。だが違うところも勿論ある。

『荳』の御台が、死の世界に入った存在であるのに対し、小栗は死の世界（冥府）から復活してきた、正確に言えば、死と生の間位置するような餓鬼の姿をとっていることである。物言わぬ対象であるのは同じとしても、死の世界に入った者に語りかけることは、情が深ければ深いほど、逆に断絶感や孤独の悲しみが強く心をとらえて離さぬ。

外形的には無言で醜悪な姿をとどめているが、冥府から蘇った小栗に語りかけることばは、全く通じないにも拘らず、孤独感はない。逆に、玉屋における対面と別れは、未来に再会を約束するかの

ように明るい期待をいだかせるものがある。

玉屋は、宿所という形式をとっている。人の出入りが頻繁な、もつとも俗らしい場であるが、説経の中ではもう一つの霊屋という呪術宗教的な聖なる契機が重ね合わされて表象されており、そこに独自の個性化がある。生きている者同志が親しく語り合う場ではなく、死者と生者の対面や会話が可能な空間であり、聖と俗が交叉し、この世とあの世の具体的な接点でもある特異な場であったといえるだろう。

二、『心中万年草』における禁忌

玉屋Ⅱ霊屋における道心と御台の対面は、すでに死の世界の人となった御台に向って、道心の赤裸々な情愛を訴えたものとして印象に残ったが、それは御台が死んでいたからこそ実現できたのである。もし生きていたならば、道心は決して会わなかったであろう。女人禁忌の掟は固く守られているのであり、そのことが玉屋Ⅱ霊屋という場を契機にして、死者と生者の恩愛のしがらみを形象する素地になっていたのである。

禁忌を犯してしまった男女が、玉屋Ⅱ霊屋ならぬ女人堂で心中した顛末を、劇として仕組んだのが近松門左衛門の「心中万年草」——宝永七年四月八日、竹本座で初演——である。

この作品は、実際に高野山女人堂で心中した事件をモデルにした

もので、作品分析はすでに先学が詳細に行なっている⁽⁵⁾。それでこの稿では、犯禁忌の問題にしぼって、どうそれが具象化されているか、説経『荊釐』との関連にも目くばりしながら、女人堂に焦点を当てて考えてみたい。

その前に、お梅久米之介の主人公達が、なぜ高野山女人堂に死に場所を求めてやってこなくてはならなかったか、一応の筋書きを述べておく。

高野山南谷の吉詳院に住む久米之介は、僧籍に入る身でありながら、神谷宿の紙屋、雑賀屋の与治右衛門の娘お梅と深い仲にある。そのお梅に京三条烏丸の紙問屋美濃屋作右衛門との縁談が起り、今日明日にも祝言をしなければならぬ。思い余ったお梅は、駕籠屋の九兵衛に頼み、吉詳院法印宛に、国許の親御の願いと偽って久米之介に山を下りるよう書状をしたためる。ところがお梅の手違いから、文を封じ間違え、法印に渡るべき書状が久米之介に、久米之介あての私情を交えた文面が法印に渡ってしまう。

さて播州のさる大名の使者として、祠堂銀を吉詳院に納めるために登ってきた伊吹千右衛門は、弟の卯之介をささいなことから殺害した本人が、実は久米之介であったことに驚く。久米之介は一旦は切腹と決まったところを卯之介の親の慈悲で助かり、その卯之介の後世を弔うという扱いで高野山に入れられたのである。

久米之介は、千右衛門の力添えによって、法印を説得し、一諸に山を下りて欲しいと懇願する。しかし、千右衛門はこの申し出をは

ねつけ、もし還俗の心があって山を下りるようなことがあれば、そのときは弟の仇として討ち果すと宣告する。ところへ法印があらわれ、先刻の文を証拠に久米之介の女犯のけがれをなじる。更にその上に、久米之介と衆道の契りを結んでいる祐弁律師も姿を見せ、その不実を激しく罵倒する。

女犯のけがれ、衆道への不義理、還俗心、それらを罰するかのように震動雷電雨あられとなって高野山は荒れ、久米之介は法印によって山を追放される。これが上の巻である。

中の巻は、神谷宿（不動坂口）の女人堂と麓の学文路との中間位にある紙屋与治右衛門の家が舞台である。京の紙問屋作右衛門とお梅の祝言に浮き立つところへ、当の作右衛門が、お梅と久米之介の噂を聞きこみ、この縁はこれまでといきまき、与治右衛門と掴み合いの喧嘩になるが、お梅の母親のとりなしでひとまず納まる。

さて山を追われた久米之介は、ひそかにお梅に会い、紙屋の二階に身を隠していたが、一部始終を聞き死を覚悟する。お梅の母は、作右衛門をなだめる一方で、お梅久米之介の短慮（自害）を戒め、石打ちの祝儀にまぎれて、二人を戸外へ逃がしてやる。そのときお梅の母は、久米之介にお梅を思い切ってくれというが、二人はすでに心中の決意を固めていたのである。

下の巻は、高野の麓から山上まで、地名づくしのお梅久米之介の道行となり、やがて二人は目指す女人堂にたどりつく。そこには思いもかけなかった久米之介の姉がいて、死んだ父の骨をもって久米

之介に会いに来たことを知る。久米之介は姉と気付くが、姉は気付かない。二人は真実を姉に告げることなく、そのまま別れると、すぐに心中して果てたのである。これが大筋のまとめである。

この作品は、実際に女人堂で心中した実説を素材に、歌舞伎狂言「八百屋お七」からの趣向を生かした世話悲劇という評価が今日ほぼ固まっている。それは動かないし、異論を唱える余地はない。しかし説経『荊萱』とのかかわり、——近松は『荊萱』の世界をかなり意識しながらこの作品を描いたのではないかと思われるふしがあり、その点にまだ追求してみる可能性が残されている。

まず『心中万年草』の冒頭の詞章を取上げてみよう。

「哥ハル女きらやる高野の中山に。なぜに女松は。生ゆ中るぞや。なぜに女松がウ生えまいならば。夜ばひ星でもフシ飛ぶまいか。松より梅より。柳よりお寺小姓のハルちご桜。ちご文殊の御相伝大師の弘めおき給ひ。俗もたつとむウ若衆の情フシ衆道秘密のお山とかや。」

これを前に述べた『荊萱』の玉屋の与次が御台に向って説く女人禁制のきびしい高野のイメージと比べると、その差は歴然としている。すなわち『荊萱』では中世における女人禁制の觀念が先行し、山上と山下がはっきりと対比されている。それに反して『万年草』は「女きらやる高野の山に、なぜに女松は生ゆるぞや」と久米之介お梅の関係を匂わし、女人禁制が破られていることを暗示しており、しかも衆道が盛んな高野山とあって、性風俗が裏面からみると

かなり自由で放埒になっている近世化された高野の実情を伺わせるものがある。⁽⁶⁾

このことと関連するが、『苅萱』の道心と、『万年草』の久米之介の高野入山の動機が異なっているとくに注目したい。

道心の場合は、還俗を迫る御台と、石童丸の追跡をのがれるために入山したのであって、これを受け入れる高野は、避難所（アジュール）のような空間として認識されている。

次の一節は、奥の院の大橋で、石童丸と会った道心が、それが実の子であるとも知らずに高野山とはどんなところかを語って聞かせるくだりで、中世末期の高野の姿をほうふつとさせてくれる。

「この山にいる者は、国許にて鵜の綱、鷹の綱、家焼き（放火）人を殺し、主の勘当、親の不興を蒙りたるもがらや、また後生大事と心がけ、所知に所領をふり捨てて、髪を剃りているもあり、この山に入る者は、みな道心者にてある。」

これとややニュアンスが違うが、同じような趣旨を述べたものに、秀吉が天正十三年四月十日に高野山へ下した寺領安堵の朱印状——その写しが高野山文書の『続宝簡集』八三一にあって全文を載せている——がある。その内の相似の部分のところを抜き書きすると、

「対天下成御敵謀叛惡逆人を、寺中被置事、不謂儀欺、道心者といふは、親を殺し、子をころし、主之用にもたたす、又失面目、もとゆひをきり、男もならざる輩、当山に在之事くるしか

るましき欺事。」

高野攻めに失敗した信長のあとを受けて、秀吉は大军をもってこれを帰順させるが、そのとき、寺領安堵とひきかえに、高野山が守るべき条項を示したものがこの朱印状の写しであるが、その内の一項が説経の先の一節とほぼ内容は同じである。

中世末期の高野山は、政治犯こそいないが俗世で罪を犯したものが、いわば道心という美名に隠れた形において逃げこむことのできたアジュールであったことをこれは証している。勿論、宗教的な女人禁制の戒律は守られていたであろう。俗界と縁を切って高野山に住むと、存外、孤独ではあるが自由で、それなりに自足した生活が体験できたのではないか。高野聖の集団懺悔の形式によって描かれた『三人法師』や『高野物語』をよむと、そこに登場する聖達にそうした雰囲気を感じるし、『苅萱』の道心も例外ではない。

『万年草』の久米之介の入山の動機や、それを通してみたときの高野は近松の眼にどう映っていたのだろうか。勿論、この作品は、事実を参考になっているが、それを超えたところに成立した虚構である。しかし近松が聴き手に訴えかけている世界は、単なる頭の中でこしらえあげた絵空事ではない。使い古されたことばではあるが、虚実皮膜のそれであって、実を全く無視しているわけではない。虚と実の間に開示される世界であるからには、実の側から逆に虚の本質に迫りうることも可能である。

久米之介の入山の動機は、梗がいでみたように、殺人の罪で切腹

になるところを、殺された朋輩の親の慈悲で、その朋輩の菩提を生涯とむらうという形にして、寺にあずけられたものである。道心のように、俗との関係を絶つたために意志的に入ってきたわけではない。そこに女犯という禁忌を破る潜在的な理由が伏線として張られていることに注目したい。

いわば生涯軟禁状態のような仕方、久米之介を高野山に拘束したわけであるが、こういう虚構が成立するためには、殺人を犯したものである、これを迎え入れるという中世以来の高野の伝統が、近世に入ってもなお生きていることを物語っている。

しかし久米之介が軟禁されている吉祥院は決して中世的な暗さはない。若衆姿の久米之介をはじめ、ひわいなことばでチャリを入れる花之丞がつくりだすふんいきは、やはり近世化された色香を漂わしており、なによりも遁世の場というよりは宿坊化された寺の様子⁽⁸⁾が、近松の筆によって鮮やかに形象化されている。

軟禁されてはいるが、華やかな世界であり、そこには衆道の契りⅡ義理も生まれている。そして久米之介はお梅と深い仲であって、禁忌を犯している。久米之介の悲劇は絶対に還俗したくともできないということであって、その点『荳蔻』の道心が還俗を頑に拒んだ態度とまさに正反対である。すでに心中死は上の巻の状況設定のなかで、抜き差しならぬ運命として二人の上に蔽いかぶさっていると見えよう。

三、女人堂と玉屋

『万年草』でお梅久米之介が心中の場として選んだ女人堂について『荳蔻』の玉屋Ⅱ霊屋と比較しながら、その特色がどこにあるか探ってみよう。

中の巻で、母親の機転によって神谷の与治右衛門の家を脱出した二人は、下の巻では手に手をとって、地名づくしの高野道行となりやがて女人堂にたどりつく。

この女人堂は「諸国より参詣の女人投宿するところなり。七口各堂ありといえども此堂最大なり」(紀伊名所図会三編四之巻)とある不動坂の女人堂である。参詣の女人はここから奥へ入ることが許されなかった。いわば聖界と俗界を分ける境に位置する女人禁忌のシンボルであって、ここで女性はお籠りしたのである。柳田国男はこの女人堂について興味深い考えを述べている。

「さて此等数箇の姥石の例を見渡して、先づ何人も心づくべきことは、各地の霊山に於ける所謂結果なるものの真の意味である。もし其制度が文字通りの女人禁制で、常に婦女を排斥する趣旨であつたならば、何もわざわざ山の中腹に於て其境線を劃するの必要も無く、又右の如く数多い違反者化石の昔話を世に遺す理由も無かつた筈である。語を換えて言はば女人禁制は同時に又例の女人堂迄の女人歓迎を意味して居たのである。蓋し普通の女は此の如き禁制を格別苦痛とはして居なかつたに相違

ない。女で無くとも病人小児の如き足弱にも、頂上を究めずに済む参拝方法があったら寧ろ嬉しかったであろう。だから立山でも白山でも、姥が化石した場処よりは大分下の方に、伏拝と言う地がちゃんとある。和泉式部が熊野で歌を詠んだと伝えらるるのも亦一つの伏拝の地で、何の為に其様な地名があるかと言へば、最初から何かの障りあるべき参拝者を予想して居たからであろう。そこで皮肉に考へて見れば、高山の中途に結界を設けるのは、却つて断念せんとする女の足弱を誘引する一手段であつたのかも知れぬ。而うして其結界の内側に頻々として女の化石の存するのは、恐らくは禁を破つた者は石になると云ふ俗信の方がもとであろう。」(傍点筆者)⁽⁹⁾

女人堂が、女人禁制の場であると同時に、女人歓迎の場でもあつたと考えるところは、柳田らしい合理主義的な判断を示したものと評価できる。むやみに女人禁制や結界という場を神秘化し、呪術宗教的に理解する仕方は、事実や経験から眼をそらすところに生まれる一種のロマンチズムであろう。柳田のとらえ方は、そういう観念的な自己陶醉に痛撃を加えた点で意味がある。しかしだからといって、全く女人堂から呪術宗教的な意味合いを削りとしてしまつていいかという、これも同じような単絡的な誤りを犯すことになる。女人堂は、女人歓迎の場であると同時に禁忌の場であつたのである。ただしその場合の禁忌の場の意味をどうとらえるかということがここで問題になる。それは簡単にいうと、罪障多き女人がそ

こでお籠りして、来世往生のためにざんげする、そういう内面的な願望に対する実修の場であつたと理解したい。

山上吉祥院の久米之介と、山下紙屋与治右衛門の娘お梅の心中の場として、女人堂が選ばれたことは、近松がそれを意識したかどうかは別として、まことにふさわしい設定であつたといふべきである。

「フシ若い中心の。一むきに。地色中死んで来世で、ハルくと。思ふ心のがつくりと。さあ着きました嬉しやと、フシ勇むは跡の歎きなり。地色中堂の内には、ウ我より先泊りしハル女中の目をさ中まし。色申し。ハル申しと呼びかくる。あいといふのもウおぢけ立ちスエテ身を抱き。あひてゐたりしが。詞イヤお氣遣ひな者ではなし。わたしは播磨の飾磨にて。成田武右衛門娘さつと申す者。南谷の吉祥院に久米之介と申す弟を。地色中尋ねて今日のウ暮方下人共を、ハル上せ問はせても。ウありともなしとも知れがたく。坂の麓紙屋の宿を尋ねよといふ人も有り。皆様所の衆かもしウ御存じも有るまいかと。ウ他人に見なすウ姉弟フシ後世の闇路も知られたり。」

禁忌を犯した者―罪を犯した者が、この高野で、誰れはばかりことなく逢い、互の愛を貫ぬき通すことのできるのは、女人堂以外にはないかも知れない。男女のかかわりをきびしく断つ、そのいわば境界に位置する女人堂は、逆にいえば、断たれた男女が、死を覚悟で一回きりに逢瀬を果す場でもある。断絶と誘引が、そこには論理

として介在しているように思う。

死んで来世で添おうの思いにひたむきにたどり着いた女人堂、気のゆるみか、がっくりとする気持の底から、それでも嬉しやと勇む心の動きは矛盾にみちているだけに真実味がある。

禁忌に縛られた男女が、死を代償として、その呪縛から解き放される世界こそ、まさに女人堂であるといえよう。

さて近松は、二人をそのまま心中死へと追いこむことなく、いまひとつの局面をつくっていく。すなわち女人堂に先客があつて、それが久米之介の姉であつたという設定である。

久米之介は、目の前の女人が姉であることに気付くが、姉は気付かない。そうした状況のもとで、死んだ父の菩提を弟とともにとむらうために高野にやってきたと告げる姉に向つて、久米之介は死んだと自ら偽りの証言をし、姉を女人堂から去らせてしまふのである。

世話悲劇の一貫性という論理からすると、これは確かにつけ足しのようなものであつて、構成の弱さを示すものかも知れない。しかし単なる趣向とも思えぬのである。

子の石童丸と奥之院の大橋で会つた道心が、頑に父であることを告げず、遂に後には、親子別れ別れに往生するという、いわば恩愛を拒みつづけた親子関係を描いたのが説経『荳』であつたが、近松はそれを受け継いでいるといえよう。道心と石童丸の関係を、久米之介と姉の關係に置きかえたのがこれである。

恩愛の情にほだされることを頑に拒むという点では共通しているが、『荳』の場合には、その頑なさをバネに、生涯を孤独に生き抜いた親子の姿をとらえるところに目的があつたが、『万年草』では逆に、死ぬための決定的な契機となつていふところが違う。

「地色ハル堂のかかげに身をひそめ、ウ片時も娑婆にゐる内は。見るも聞くも皆罪障、夜明けも近付く此の上に。いかなる苦しみ恥をか見んいざ死なうと色ささやけば。詞早う死にたうござんする。……」(傍点筆者)

見るも聞くも皆罪障ということばを言わせたものは、実の姉に向つて名のりをあげることできぬ久米之介の、心中死に傾斜するひたむきな心であり、それは裏返すと、「後世の閻路も知られたり」とあるように、来世で地獄の閻路をたどることを明白に自覚している醒めた心でもある。

同時にこのことばが、女人堂でいわれていることの意味は大きい。先にもふれたように、女人堂とは、禁忌を犯した男女がこの世で逢うことのできる唯一の場であり、あの世とこの世を分ける境界でもある。それといまひとつ大事なことは、そこが罪障さんげの場でもあつたことである。勿論その場合のさんげが女性だけに限られているのはいうまでもないが、近松はそれを死にゆく二人の罪障さんげの場として更めてとらえ直しており、そこに新しさがあつた。女人堂で心中することによって、一切の罪障は祓われ、未来成仏疑いなしと、近松はここで二人の魂を浄化し、救いといつていふと

もいえる。ことばを代えると、女人堂での明確な罪障性の自覚が、浄土往生への架け橋になっている、そういう展開がここにあるといえよう。

さて最後の場面を、近松は次のようにしめくくる。

「分ハルけて給はる骨肉を一つにかえす阿字本不生。阿字の一刀是なりとのんどにぐつと突き立てて。ウ死骸の上にのりの花梅と枕を並べける。地水火風の風は山、水は谷水土は又。土砂の功德の、ウ真言秘密。キン善男子善女人堂心中。かくとぞ聞えける。」

死とともに二人は、地水火風の宇宙に回帰し、大自然に融解したのであろうか。光明真言で加持せられた土砂を死体に散布すると、その功德によって極楽に往生するということであるが、大自然に回帰することと極楽往生が、真言秘密の法力によって成就されている結末である。こうした未来成仏を約束しているのは、先にもふれたように二人が罪障さんげの場である女人堂で、その罪障と刺し違えるようにして果てたからであり、近松はそれを充分計算しながら描いているのである。

説経『荳薈』における柱は、場の問題に限っていえば、学文路宿の玉屋Ⅱ霊屋である。

近松の『心中万年草』の見せ場はやはり女人堂であろう。

女人禁忌の呪縛から解放されるためには、それなりの歴史的仮構を必要としたのであり、中世から近世へと、廻り舞台のように時が

暗転するなかで、それは玉屋Ⅱ霊屋であり、女人堂であったと、二つの作品を対比し、つき合わせてあれこれ考えた末の、これが到達した結論であったといえよう。

註(1) 「紀伊国名所図会」 卷之四

学文路——此村旅舎多し。玉屋与次兵衛という臥房繁昌す。荳薈道心の因縁ある家なりとぞ。

「紀伊繞風土記高野山事部、卷五十七旧跡拾遺、山外」

学文路——古くは禿村と書せり。河根より險坂高低一里許にして山麓に一村あり、客舎茶屋など軒を並ぶ。路右に仁徳寺とて荳薈入道の旧跡あり。……中略、又玉屋与次兵衛の事歴、或は物狂石など古跡ありとぞ。

(2) 定本柳田国男集 第十五卷

「葬制の沿革について」五十四 p

・栄華物語 七 鳥辺野、崩じたまひしことを云ひて「鳥辺野の南の方に二町ばかりさりて、たまやと云ふものを作りて、築地などつきて、ここにおはしませむとせさせたまふ。」

・玉勝間十一の巻、四六霊屋

「栄華物語鳥辺野の巻に、一条天皇の皇后宮のかくれさせ給へるを、をさめ奉る事をいへるところに、とりべ野の南の方に、二町ばかりさりて、たま屋というものをつくりて、ついぢなどつきて、ここにおはしませむとせさせ給ふとあり、今の世に御霊屋といふ名、此たまやなり。然れどもかのたま屋といへる物、今の御霊屋と、全く同じとは聞えず、いささか事かはりてぞきこゆ。」

なお随筆では「尊骸をおさめ奉る処をタマヤといへる也」とあって、今の世のオタマヤとは廟を指すものであって墓は別にありといっている。

(3) 「紀伊国名所図会」 卷之四

玉屋―宿の全景が描かれており、泥田坊の歌が「荇萱」のパロディーとしてのっている。

かるかやの、むかしの里、としぐにしがり、さかえて遊びども、おほかるれば、あそびめの、顔の玉屋に、ゐつづけの、子を尋ねくる父もあるべし。

(4) 関寺については、「近江国輿地志略八志賀郡、関寺」「寺門記補録九、世喜寺中興縁起」参照、中興縁起には、世喜寺在三ヶ会坂山東麓近松寺南二草創及び開租など未詳レ之とあり、輿地志略も別伝をのせているが、大略はこれと同じ。

玉屋については不明。宮内庁蔵 絵巻「をぐり」の玉屋の絵に、三つの玉をあしらったのれんをかけた宿屋らしい建物がかかれていて、その門前に、土車に乗った餓鬼の小栗と、巫女姿のてるてるが見える。

(5) 松崎仁「心中万年草小考」立教大学『日本文学』第十七号

諏訪春雄『近松世話浄瑠璃の研究』第一部成立論 第五章「心中万年草」

(6) 少し時代は遡るが、十二世紀末と思われる少人(稚児)禁止の置文があるで紹介しておく。

「高野別所狼藉制止置文案」(『高野山文書』第一巻 宝簡集三十七 四四二号)

金剛峯寺の別所院主並びに沙汰人禅行房の所へ。

早く別所の狼藉を制止し奉らる可きの事。

右、高野別所は他処に准ずべからず、是れ清浄持律の聖人の住処なり。更に放逸破戒の濫行の所居に非ず(中略)而して近來浄行持律の御中に、放逸不善の輩相雜り、或は少人を迎え送り、或は自房に置いて同宿す。茲に因り、種々の悪事連々絶えず。同衾同愛し相反逆し、或は怨嫉を結び、或は房舎を打て、口舌浄論すること相續いて絶えず。

是れ更に別所の本意、隠者の所為に非ず。

五来重氏は「高野聖」一三七pで、右の置文にふれ、少人(稚児)と同衾同愛するような事態は、道心なしに來隠するものが多くなればなるほど、おこりえたであろうといわれる。近世に入るとこの傾向は一段と強まったことが予測される。

(7) 「紀伊統風土記」「紀伊国名所図絵」

西院谷と往生院谷に吉祥院が実在した。

(8) 滝 善成「日本歴史」——高野の宿坊——

(9) 定本柳田国男集第九卷

——老女化石譚——一四二p

(10) 「高野山参詣案内」中本光三編 明治四十二年発行

この中で、「万年草」上演より少し後のことであるが、江戸飯田町の某女が、女人堂の前に地蔵尊を立てたときの主旨が次のように書かれている。

——銅像の地蔵尊。女人堂の正面にあり、施主は旧江戸元飯田町横山たけ女。比翼連理を契りし亭主に死別、愁歎の中にはや七々日の仏事もすみ、亡夫の白骨を頸にかけ、泣く々々高野山に参詣し、女人堂に籠り、地蔵尊の靈夢を蒙り、一には亡夫菩提のため、二には女人成仏のため三には罪障消滅のため、一念發起して大阪観音院元照上人、並に江戸法師言道房へ委託して鑄造し、延享二(二七四四)乙丑五月十五日高野山に建納せしものなり。——

地蔵尊建立の縁由を語っているが、女人堂でお籠りしたときの靈夢がきっかけになっている、女人堂が女性の罪障ざんげ(消滅)や、成仏のための籠堂であったことがわかる。